

## 田山さんの事(一)

前田 晁

田山さんが亡くなられた。□然とした大木が倒れて、にわか一方の空が空虚になった淋しさだ。

○  
五月十三日の—といえば、その日の午後四時四十一分には全く眠るが如くに息を引取られたのだが—その日の払暁、最後に苦しい息の間から田山さんはきれぎれにわたしに言われた。

『いよいよ、君、お別れだ。ただ、もう一つの作が出来なかつたのが残念だ。それが出来れば、自分の仕事は全く完成したのだが、とうとうそれが出来なかつた。それが残念だが、仕方がない。』

この作というのは明治維新の際の士族の没落を一大長編に書こうとしたもので、その腹案はかなり久しい以前から持っていたのである。おとしの暮、いよいよそれに着手されようとした時に脳溢血に罹ったので、その時にも非常に落胆されたが、その後、幸いにこれが快方に向かわれたと思うと、今度は更に一層恐るべき喉頭がんという強敵の埋伏に出会って、ついにそれと戦いきれずにたおれたのである。

明治維新の際の士族の没落は、今日のインテリゲンチヤの運命を暗示しているとも見られるのであるから、この作は多分現代にアツピールするものとなって現れて、更

に作者の一新生面を開いたかも知れなかつたのだが、惜しいことに折角長い間かかって集めた知識や材料なども、ついに生かされることなくなくなってしまったのである。

○  
脳溢血について喉頭がんという二大敵に對して、田山さんの戦われた戦いは実に必死的であつた。断じて生きるという強い自信は今月の八日までも完全に續いていた。もちろん、その間、常に非常な不安におびやかされ通していたことはいうまでもないのであるが、先月二十四日以来、全く流動食になつてしまつてからさえ、なお且その自信を失わずにいられたのである。

先月十八日にお目にかかつた折なぞは殊に元気がよくて、もう少したつたら、気候もいしするから、久しぶりで熱海のベ吉のところへ一緒に行つて見ようなどと言われたくらいであつた。無論、そのうちにはもつとずっと快くなることを信じていられたのである。ベ吉というのは、以前、向島の方にいた老妓で、三味線が非常にうまく、田山さんが二十年近くもひいきにしていた一人である。わたしも宴席でしばしば出會つてよく知つていたのであるが、それが震災に遭つて以来転々して、今はそのつれあいで□間をしていた延寿というじいさんと共に、熱海の来宮神社の傍に延寿旅館というのを営んでいるのである。

ベ吉達の知らせによると、夫婦が番頭にもなり料理番になりお座敷の方をもやつても女中の二三人くらいはつかつてゐる小

旅館らしいのが、静かな部屋もあるというから、ゆったりした気持ちで、気が置けずにいられるのを取柄に出かけて行って見ようというのであった。

『向島で鳴らした妓おんなが、転々として、あすこまで行った形に人生がある。』

例の口癖の『人生』をここにも出して、田山さんは彼らの上に何か特別な興味を寄せていられるようでもあった。

それくらいに健康の回復を信じていたのが五月八日の一度の発作で、たちまち何もかも的一切が急変したのである。

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新かな遣いに改めたが、表現上改めていない箇所や補訂を加えた箇所もある。判読不能な箇所は□で表した。

※出典 当館所蔵 田山家資料新聞切抜帳より